View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

子別れと父親について　(2010年度 公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て)

著者	根ヶ山 光一
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	12
ページ	44-51
発行年	2011-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002710

子別れと父親について

根ヶ山　光一

早稲田大学人間科学学術院教授。専門は発達行動学。子どもが育っていくことは親と子が別れていくことであるという、分離の視点に注目した発達過程研究の先駆者。精力的に国内の離島や海外でのフィールドワークを行っている。著書は『発達行動学の視座』（金子書房）、『〈子別れ〉としての子育て』（ＮＨＫ出版）、『子育ての進化と文化』（有斐閣）他。

皆さん、こんにちは。根ヶ山です。三〇分以内ということで、手短にお話しさせていただきます。

「子別れと父親について」ということで、普段私は父親の問題をメインに仕事はしておりませんが、いい機会をいただいたので、子別れに引っかけてそういうことについて考えてみたいと思っています。今まで三つのご発表をそれぞれ聞かせていただいて、大変面白いなと思って拝聴しておりました。と同時に、私は一世代前の子育てをした男性として、あまり立派に子育てをしてきた人間ではございませんので、自戒と反省を込めて話題提供するようなことになってしまいます。

私の専門はもともとは動物行動学、霊長類学でして、サルを見る立場から人のお父さんというのはどういうふうにあるべきものなのだろうかということをお話しするのが私の一つのスタンスになります。

ハーロウという人の非常に有名な実験をお話しします。ご存じの方がたくさんいらっしゃると思いますが、お母さんの人形が一対ありまして、針金のお母さんからミルクが出る。布製のお母さんからはミルクが出ない。でも、この子ザルはおっぱいを飲むときでも、布のお母さんにしがみつくということを続けている。つまり、スキンシップがいかに大事かという話ですね。その針金のお母さんがいるときには、見知らぬ部屋に入れられて縮こまっているサルが、布のお母さんがいるとリラックスして探索を始める。これも有名な話ですね。アタッチメントを提唱したボウルビィにすごくインパクトを与えた研究です。一九五〇年代ぐらいにこういう仕事がなされました。つまり、母性というのは大事だというメッセージにつながった源泉のような研究です。

一方、私自身は、ニホンザルを観察していて、母親が子どもを噛む行動がしばしば見られることが学部生から大学院生ぐらいの頃から気になっていました。岡山県の山の中に群れがありまして、そこで研究していたわけですが、毛繕いを受けていて、

大きくなった子どもがお母さんから「あっちへ行きなさい」と突き飛ばされたりするのです。このお母さんは虐待傾向があるお母さんだろうか。違うんですね。どの母ザルもある時期にこういう行動を示します。頻度はそんなに多いわけではありませんが、ある時期しばしば見られるんですね。子どもを自立させるときにそれが非常に役に立っているということです。

ヒトの場合には、文化、あるいは世の中の価値観や立場、理性とかいろいろな衣をまとって本質が見えにくくなっていますが、そういう衣を剥ぐと、根っこはサルなんかと同じものがあるはずです。われわれだってサルですから。ほかの動物を見ていると、むき出しになって見えてくるところから学ぶべき原点があるだろうと私は思います。

環境の中にいろいろなプラスマイナスの資源があって、それを受け入れたり遮断したりしながらわれわれは生きています。食べるとか、呼吸するとか、排泄するとかというのはそういうことなわけです。そういうふうにして環境から資源を取り込んで成長していくと同時に、その身体からもう一つ身体を生み出す。これが繁殖です。心理学ではそれを発達と言いますが、生物学的に言えば繁殖なんです。視点を変えればいろいろなネーミングができて、多角的なというか、多面的な姿が見える。だから、あまり一つの見方にこだわって、それだけが絶対化してしまうと非常に窮屈なことになるけども、違う角度から見ると違うフレームワークが立体的に見えてくる。こういうものだと私は思っております。

「個としての母・子のコミュニケーション」は、親和的なやりとりと反発的なやりとりが複雑にまたダイナミックに組み合わさって成り立っています。反発性をお互いに向け合う。あるいは一方は親和的に手を差し延べているけれども、他方が拒否しているなど、さまざまな組み合わせが実はやりとりの中にはあるわけですね。アタッチメント的なイメージは親和性だけしかなくて、ある意味でその母子像は貧弱と言えば貧弱。シンプルですけれども、そんなに単純なものではないというのは、今の先生方のお話を聞いていればよくわかる話です。しかも、この四つが非常に固定化しているわけではなくて、ダイナミックに刻々展開するのが子育てだと思います。

反発性の要素は、例えて言えばこういうものです。お母さんが、「あっち行ってらっしゃい、うるさいわね」というのは一つの反発性の姿ですが、厳しくしつけをする、子どもが泣いて言うことを聞かない、あるいは子どもが関わりを拒否する、こういうものすべてが反発性です。それから、母子間で直接に反発性を向け合わなくても、子どもに好奇心があって外に引っ張られていくと、それは母子を遠ざけることになりますから、遊びに行ったり、探索に行ったりするというのも一種の反発性です。それから、母親が自己実現をしたり、趣味を楽しんだり、

あるいは社会活動をすることもある意味で反発性です。反発性というのは、実はこういう多様な姿を持っているんですね。

そういうものを母も子も持ちながら、かたや守ってあげたいけども、自分一人になって、今のような外向きの行動も実現したい。子どももそうですよね。お母さんに甘えてもみたいけれども、外の世界にも展開していきたい。愛情であると同時に負担である。愛情であると同時に束縛を感じることにもなる。手をつなぐというのは、相手を拘束するということです。愛というのは、度が過ぎると相手を拘束したり、こっちに非常に負荷がかかったりするものでもあります。こういうのをヤマアラシのジレンマと言います。母と子がヤマアラシのようにお互いの体にとげを持っていて、近付きすぎると相手のとげが刺さる。離れすぎると寂しいけども。そういうジレンマの状況にあると言う人がいます。私は非常にこの表現が好きです。

母と子どもは生物学的に言いますと、自分の遺伝子を半分だけ共有している者同士です。半分共有しているということはお互いに等質というか、同じ性質をシェアしていることを意味しますが、半分しか共有していないということは異物だということなんですね。臓器移植をしたときに拒絶反応が起こりますけれども、母子というのはそういう関係です。免疫学的には拒絶反応が起こるようなものも持った存在なんですね。半分遺伝子を共有しているけれども、半分は異物であるという矛盾した側面も持っている。それが母子である。

私は飼育下のサル十数種類の母子を、子どもが生まれたらその檻に通って、母親と子どもを観察するということを一年間いたしました。そうしますといろいろなやりとりをするので、その行動を多変量解析の手法を使って分析し、二本の軸を得ました。第一の軸は一年間の間に「接触している」「離れている」という軸です。それから、第二の軸は何かというと、親が子どもの行動を調節するか、子どもが勝手に自立的に行動するかという軸です。親が子どもに攻撃を向けるのはこの軸に強く反映される行動です。

マカカ属というニホンザルを含むグループでは、親がよく接触するけれども、攻撃や調整もよくする種類と、すぐに離れて親もあまり調節をしない種類があり、両極をなしています。それからもう一つのグループは類人猿で、オランウータンやチンパンジーなどがここに入ります。この私たちに一番近いサルたちは、あまり親が子どもを調節しないで、わりと接触を持続する接触型で分離が遅いサルたちです。試みに人間のデータを追加してサルと同じような分析をしてみたことがあります。私が日本とイギリスで取ったデータを入れてみると、離れつつ攻撃しないという場所に位置づくことがわかりました。攻撃ではなくインターフェースを使って遠ざけるタイプであるといえるのです。

哺乳瓶やハーネスなどを介して母子の距離が隔たるということがあります。動物では環境と子どもの間にお母さんが介在して、資源のバトンタッチや仲介をしていますが、ヒトの場合にはそこに今申し上げたモノだとか、あるいはヒトだとか、あるいは保育のようなシクミが介在する。つまり環境と子どもの間に母親とヒト・モノ・シクミの二重のインターフェースがあると私は見ております。母親というのは一次的なインターフェース、それから母と子どもの間にもう一つ二次的、文化社会的なインターフェースがある。こういうふうに思っています。その二次的なインターフェースに子どもを委ねて、お母さんが子どもから離れるというのが、ヒトのすごく特徴的なことだと思っています。これが私の考えている子別れの本質にかなり関わる部分であります。

ブロンフェンブレンナーという人が考えている生態学的モデルというものがあります。家庭と保育園の間を行ったり来たりする子どもの姿ですね。お父さんの職場なんてものもそれに関係するすぐ外側のシステムだということを言うんですね。その外にもっと社会の重層的な、例えば文化だとか制度だとかというものが取り巻いています。だから、母子だけではなくて、家庭だけではなくて、それから地域だけではなくて、と入れ子構造で見ることができる。そういう重層的な構造の中に母子はいる。

だから、アタッチメントだとか母子というのはもちろん大事な考え方なんですけれども、その外側に母子が開かれて、それを取り巻いている豊かな世界が重層的にあって、そういうものと関わりながら子育てをし、子どもが大きくなっていく。そういうことを知る必要があります。お父さんというのは、その一要素になります。ヒト・モノ・シクミの中の一つの要素がお父さんということになります。

離島の研究には今日はあまり触れることはできないと思って、話題を用意してきておりませんが、私が今研究している多良間島の話をしたほうがいいなと思いながら先生方のお話をお聞きしていました。石垣島と宮古島の間にある人口一三〇〇人あまりの小さな島です。そこに住み込むような形でフィールド調査をしております。

これは多良間保育所というところの子どもたちの散歩の様子です。［動画再生］子どもも島の人もみんなお互いを知り合っているんですね。道行く人、道行く人がみんな手を振ってくれる。子どもも手を振る。この雰囲気ですね。保育園から出ても、外の世界につながって大人がみんなを見てくれているし、子どもも知った大人と出会っているという状況の中で子どもは育っている。

そういう保育の仕組みの中で、地域の中に保育があるということをちょっと雰囲気として知ってもらうためにビデオを見て

いただいたんですね。つまり、「ヒト・モノ・シクミ」が入れ子になっていて、その複雑なシステムの中の一つの重要な要素にお父さんがいる。あくまでもワン・オブ・ゼムで、それ以上でも以下でもない。だから、母性愛神話がよくないと言って父性愛神話になって、今度しんどくなるのはお父さん、というのでは困ります。本当はネットワークシステムなんだ、と思います。子どもを外に引っ張っていくために今度はお父さんだけが頑張ってねという話ではなくて、実は周りに豊かなシステムが網の目状にあって、その一つがお父さん、というイメージを持つべきだと思います。

さて、マーモセットというサルがいます。このサルはお父さんが子どもを背中に背負って運びます。事実だけ申しますと、サルというのは基本的にお父さん行動をするオスは少なくて、これはまれなサルの一種です。

哺乳類の繁殖集団には単雄複雌型と単雄単雌型があります。単雄複雌型は俗にハーレムと言われるものです。単一のオスがいて、複数のメスが取り巻いている。単雄単雌型は一対のオスメスで子育てをする。そういうものなんですけれども、ゾウアザラシが単雄複雌型の例です。単雄単雌型の例はゼニガタアザラシです。同じアザラシでも違う。性的二型が大きいのは単雄複雌型でオスがすごくマッチョな感じです。小さいのは、どちらがオスかメスかわからない。そういう二種類が哺乳類にあります。単雄複雌型のオスはあまり子育てをしない。単雄単雌型のオスは子育てをする。

では、人はどうなんだろうという話です。母親も父親もともに子育てをすれば自分の遺伝子がよく残るわけですけれども、生物は両性がそれほど必ず協力的だとは限りません。父親だけが子育てするタイプもいます。トゲウオはそういう性質を持っています。一方、メスに子育てをさせて、自分はいなくなるというオス親もたくさんいます。哺乳類はそれが一つのプロトタイプですね。客観的事実として申し上げておきます。

そうではありますが、さっきのマーモセットのように一緒に協力して子育てをするものもおります。雌に子育ての負荷が大きい、受精した子どもが自分の遺伝子を持っていることの確実度が高い。そして、シェアして子育てをするのが両方の繁殖に有利である。そういう条件が幾つか重なったときにこういうことが見られることもあります。

人間はどうかというわけですね。お父さんが抱っこしたり、お父さんが食べ物をあげたり、散歩に連れて行ってあげたりというのは、人間の場合については私たちの身の回りで見られている。非常に多様な子育てのあり方がある中で、文化人類学者が、父親の子育ての関与がわずかなもの、多いもの、中間という三つのグループに分けた結果、どんなお父さんが子育てをしているかというと、わずかな関与をしている社会でよくやられ

ているのは、おむつを替えたり風呂に入れたり、子守をする、こういったところです。それから、母親と子育てをシェアしているような父親が頑張っているのは食事系が目立ちます。それから、一緒に寝かしつける。

日本のお父さんは残念ながらこういう基準で見たところでも、おむつを替えたり、お風呂に入れたり、散歩に連れていったりということが多い点からすると、あまり子育てに協力しないタイプの父親行動の群にある。

日米仏で子育ての比較をしたことがあります。日本のお母さんに強く見られるものとして明らかになったことに、自分の子育てに対して非常にネガティブだということがあります。「産まないほうがよかった」とか、「母親として不適格だ」という言葉が見られます。日本の母親は子育てをすごくネガティブに受け止めている。子どものためにすごく尽くすけれども、子育てを楽しんでいるということが相対的に低い。

それから、これは柏木先生のデータですけれども、育児不安とお父さんの育児参加の関係でいくと、お父さん、夫がサポートしてくれると育児不安が小さいというデータが出ています。つまり、お父さんが参加してくれることが、母親の子育ての負担やネガティブなイメージの軽減につながっているということですね。

私のデータの一部で、お父さんの体がにおうかどうかということを聞いたものがあります。お母さんの体がにおうかどうかということを聞いてみますと、「お父さんの体のほうがよくにおう」という回答です。かつ、そのにおいが気になるかと聞くと、お母さんのにおいは気にならないけれども、お父さんのにおいは気になる。つまり「臭い」。さっきも出ていましたね。お父さんって臭いというわけです。お父さんという人物に対する否定感が強い。お父さんというのはおのずと家族であるわけですけれども、そこで「家族をする」ということがなければ、すごく存在が危ういということになると思います。

今滞在して調査している多良間島で、追い込み漁を子どもたちに教えるプログラムがありました。お父さんたちが沖で網を張って、子どもたちが浜から魚を追い込むんですね。そういう一種の学習プログラムです。そんなに危ないことはいたしませんが、ライフジャケットを着て、「言うことを聞かないと死ぬよ」みたいなことをお父さんが言っているわけですね。で、お父さんが「さあ来い」と言って向こうで網を張って待っていて、号令を待って子どもたちが魚を網に追いつめるというプログラムです。

あるいは、保育所の中でお父さんが労働奉仕をして、草刈り、芝刈りをしたり、大掃除のお手伝いをしている。あるいは、下校時にユンボ［→油圧ショベル］を運転するお父さんが子どもをピックアップして帰る。こういった島の生活の中で大人の生

活の場面と子どもの生活の場面が混ざり合っている状況にしょっちゅう出くわします。都会ではそういうところで一緒にならないだろうというところで、子どもと大人、父親、母親が姿を見せ合っています。さっきの南オーストラリアの大学の取り組みがありましたけれども、生活の中で親と子どもがいっぱい姿をさらし合っている感じがあります。

マザリングというのはお母さんがすることですけれども、アロマザリングということの中でそれを母親以外の個体がする役割を担っている。その一つがお父さんということですね。そして、それは子どもにプラスにもなるけれども、母親にも当然プラスになるということですね。私は子別れということを考えておりますから、子別れの促進ということにつながっていると思います。

時間がないので、説明をちょっと端折らざるを得ないところがあって、申し訳ないんですけれども、家族の中の父親として見れば、母親と父親ともに子育てをシェアする。コーペアレンティングという言葉があって、二〇〇〇年代以降そういう研究が盛んになされております。お父さんも子育てに関わる。ただそれは、母親と同じ子育てをするわけではなくて、母親に対してファシリテートしたり、あるいは母親と子どもの間の緩衝材になったり、あるいは異なる情報や価値観を提供したりする。つまり、お母さんと同じことをするわけではなくて、相補性といいましょうか、そういうものが必要かと思います。そのように家族に関わること、「家族をする」ことで父親自身にも家庭での居場所ができるということになろうかと思います。

最後に、今までのお話を聞いたり、私自身のデータを踏まえて、こんな提案になろうかなということをさらっと述べます。

（1）育児というスリリングで創造的なドラマの観客や脇役から主役（ただしお母さんとシェアする、共演する）になったらいいと思います。

（2）アロマザリング社会の実現。お父さんがいて、周囲の資源へのリンクをしたり、あるいは家庭の外と中を相互乗り入れする。そういう接点のような役割があるかなと思います。

（3）子育て像のこわばりを解体するような役割があるかなと思います。母性愛というものも父性愛というものもあるでしょう。でも、今までの話の中で、そこにまだこだわりがあって、そのことがお父さんの子育ても非常に束縛しているというか、子育てをしんどくしている。さらに一層神話が固まってくると大変なことになるんじゃないかなということを思わせる。そういうふうなことがあります。子育ては重層的で多面的で開放的で、ほどほどでいいんだよと。そういうことを考えていくようにすればいいんじゃないかなと思います。

（4）私はもともと動物行動学者でありますから、楽しいことには何か意味があると思います。遊んで楽しいとか、あるい

はお父さんの身体資源をすごく子どもが求めている。例えば遊びの中で子どもがそういうものを求めている。農業や漁業はお父さんの身体資源で営まれるものです。そういうところを子どもが見たり体験したりするのはすごいことだろう。すごいお父さんということになると思うんですね。それをいやいややる、義務でやるのではなくて、エンジョイしてやる。そういう行動特性やメンタリティを持っている。それをもう少し素直に出せるような場ができたらいいなと思います。

（5）男性は社会的なメンツをすごく気にしますから、周囲はうまくおだてていくようなことも有効な手だてじゃないかと思います。

（6）親がどのような子育てをするべきかという議論ばかりではなくて、子どもが何を求めているかということを問うことによって答えが出てくる部分もあると思います。それはお父さんが楽しめばいいんじゃないのということと表と裏の関係ですけれども、子どもがどういう父親像を求めているのかなということを子どもに聞くということがもっとあってよいと思います。

そういうことを総合すると、子別れ的な観点ということになろうかなと思うんですね。そういうものをもう少し導入して、お母さんの問題だけではなくて、お父さんの問題も考えていくと、何か突破口、展開が開けるのではないか。そういったお話をして終わりたいと思います。

高石　どうもありがとうございました。先生には、母親と子どもの間には親和性、愛着の関係だけではなくて、反発性というものもあるはずだというお話をしていただきました。それから父親の子育て参加、父親の役割と言ったときに、子どもに直接関わろうとすることばかりに目が向いてしまうと、結局は大日向先生のおっしゃったV字型の関係にはまってしまうということで、それは母性神話の代わりに父性神話を父親に押し付けることになってしまう。そういう落とし穴にも気をつけないといけないということにも気付かせていただきました。